

てしろぎ
《手代木さんのこと》

小田嶋利江

1999年から2003年の升沢調査において、手代木さんの撮影行に同行した回数は、調査員のなかではわたしがもっとも多かった。それは、旧家の伝承や、船形山神社をめぐる信仰と伝説など、彼の興味関心のむかう方向が、わたしが担当する口頭伝承とかさなるところがあったからでもあり、報告書の「第二部 升沢でくらしして」(*)にむけた聞き書きと写真撮影のために、旧升沢住民の移転先を、調査の後半期に週に一度二人で組んで訪問して歩いたからでもある。

手代木さんはきき腕だった右手に障害があり、調査におけるすべての作業活動を左手だけでやってのけた。デジタルカ

メラが日増しに高性能になっていた時期だが、彼にとってはフィルムカメラの方が、シャッターを切るときの具合がいい、障害が少ないのだと言う。大型の一眼レフカメラ、ニコンF5を左手で構え、左手でシャッターを切る。腕や顔や体の全体を使ってカメラを固定するために、手製の補助具が機体に装着されていたり、テープが巻かれていたり、さまざまな工夫が見てとれた。機体を磨き上げて愛でるカメラ愛好家ではない、カメラを道具とする写真屋なのだと感じた。

手代木さんは、写真撮影のみの調査員ではなかった。ひよろりと立って、飄々ひょうひょうと升沢の道を歩きながら、通りかかる顔見知りの住民と軽口まじりに世間話をし、既成の調査項目にないくらしの襞ひだの奥の人々の素顔をひきだしてくる、そんな人なつこさがあった。

そして、自分の感性に触れる事柄は、事実の細部にこそこ

だわって描き出そうとした。彼はメモもデッサンも左手でこなすが、昭和二十年代を最後に営まれなくなった木流しの時の堤（**）の外観構造を、経験者たちからの聞きとりのみで、何度もデッサンを書き起こしながら、精緻なイラストへと仕上げた。それを見せられて、その手書きの心地よい見事に目をむくとともに、そうした「聞き描き」、聞取りによるイラストへの復元という記録方法がありうることを教えられた。このとき、手代木さんが若いころ美術を志したことを知った。

ほかに、すでにない旧家の古民家の屋敷配置と間取りや、年越しの膳、正月飾り、小正月のアワンボ・メエダマの飾りなどを、聞き描きによってイラストにし、それらは報告書にも収められている。

彼はフィルム交換のとき、カメラをその場に置き、裏蓋を

開けてカートリッジを抜いてジャケットのポケットに入れると、同時に新しいカートリッジを取り出し、フィルムの端を口でくわえて引き出し機体にセットする。もちろんすべて左手でこなす。かたわらで、升沢の思い出を聞き書きしながら、いま思うと、手助けしようなどということは、最初からまるで思い浮かばなかった。彼一人の撮影行のときと同じ作業でしかなく、障害のある右手について、その経緯もそのこと自体も、話題にすることすら思いつかず、その必要もなかった。それがわたしと彼との関係性だった。

手代木さんは、この記録写真展を間近にして、今夏の8月24日逝去された。その訃報をご子息から告げられて、もとよりなんともいえない寂しき残念さにとらわれた。あらためて思うと、わたしは彼のことをなにも知らないのではないか。同行者にカメラを向けたこともなく、手代木さんの写真はわたしの手元には一枚もない。知らないうちに彼が撮っていた

わたしたちの調査風景は、何枚も残っているというのに：

つねにかたわらで聞き書きをしながら、同行する仲間には、ことに重い時間を重ねてきただろう仲間に対しては、なぜ問うことをしなかったのか、自分に問うことになった。

升沢の人たちを移転先に二人で訪ねていたころ、往復は大和町吉岡と地下鉄八乙女駅を結ぶ路線バスだった。バスの中で話が尽きることはなかったが、それは升沢の山や川や人の小さな、さもない、雑多な、そして報告書に載せられそうもないことどもがほとんどだったような気がする。でもこれがないにより楽しかった。

手代木信成氏のご冥福をお祈り申し上げます。

東北民俗の会 小田嶋利江

(*) 升沢調査の報告書『升沢にくらす―集団移転に伴う民俗調査報告書―』(2003 大和町教育委員会・東北民俗の会)の「第二部 升沢にくらしで」では、移転各家族の紹介と住民から聞き書きした升沢でのくらしの思い出を収めている。

(**) 木流しにおいて、本流である荒川沿いの山から木を伐りだすときは、直接荒川に薪木を流しだすことができるが、小さな支流沿いの山では、丸太や材木を組んで築いた堤に水と薪木をため、その堤の口を一気に開いて水と薪木を放出する流勢によって本流まで流しだした。

《手代木信成氏略歴》



手代木信成氏のご子息幸成氏からお聞きした信成氏の略歴を記す。

昭和十四年（1939）1月22日、宮城県黒川郡富谷町穀田

（現富谷市穀田）で代々続く手代木家の三男として生まれる。兄弟は姉一人、兄二人、弟一人の五人。現在の大清水の分譲住宅が開発された時、生家の山を手放し、現在は国道わきの広大な敷地にイオンスーパーなどの大型店群が林立する。

信成氏は地元の富谷小学校、富谷中学校と進み、高校は大和町吉岡の黒川高校に進学した。絵を描くのが好きで、美術専攻の学校に進みたい希望もあったようだが、生家が農家ということ、明治三十四年（1901）に黒川農学校として開校された宮城県

黒川高等学校、通称「くろこう」を選んだのではないかという。絵は油絵を描いていたようで、さらに山岳部に入って登山にも力を注いだらしい。そのころから船形連峰には、登山者にとっての身近な秀峰として親しんでいたのであろう（*）。

その後、結婚して幸成氏が生まれ、絵画の道はあきらめたという。

信成氏の職歴は多彩である。二十代で東北財務局に務めるも、職場が合わなかったようで退職。その後、広告看板などを制作する会社に就職、好きな絵を描く仕事を四十歳前まで続けた。その後転職して自動車の整備士として働く。もともと機械いじりは好きだったという。五十歳ころ車の整備中に大きな事故にあい、右腕に障害を負う。

事故の後退職、もともと趣味であったカメラに没頭するようになる。退職したとき、仲のいい兄から「もう一度絵を描いてみた

らどうだ」とすすめられるが、「もう絵はいい」と答えた。「やっぱりそこで、ふんぎりつけたんでしょね」と幸成氏は言う。

写真クラブなどの組織には属さず、一人でいろいろ撮っていたようで、最初は自然の風景や鳥などが被写体だった。奥さまが踊りを趣味として、秋田の西馬音内盆踊りにグループで参加できることになり、信成氏は同行して毎年西馬音内盆踊りの写真を撮っていた。それが糸口となったのか、民俗芸能、祭礼などを県内各地を訪ね歩いて撮影するようになり、伝承文化一般への関心を広げていったのではないかという（**）。

その後、東北民俗の会に入会し、升沢調査会に参加することになる。升沢に通った回数は、調査員のなかではとびぬけて多い。車の運転ができない信成氏は、本数の少ない町民バス以外交通の便のない升沢に、あらゆる足の便を駆使して通い続けた。自腹で吉岡からタクシーを使ったり、地元の写真仲間や親族に車を出し

てもらったこともあった。ご子息の幸成氏も一度、信成氏を車に乗せて冬の升沢を訪ねたという（**）。さらに吉岡で自転車を調達し、山と峠は押し越え、自転車で何度か行き来したと笑いとともに聞かされた。

十年前に奥さまが逝去されてから、気落ちしたこともあり、また右手の痛みが激しくなったこともあり、ほとんど外出せずに家で過ごすようになる。そんなときにも、地元の町内会から頼まれて、撮りためた写真をスライドにして、町内の人々に披露したりもした。二年前には、唯一残っていた仲のいい兄上が逝去された。

信成氏は、今年の6月ころから急に歩きづらくなり、7月前にはまったく歩けなくなって、7月初頭に入院した。診察によれば、足腰より内臓の方の症状が進行していた。腕の痛みを抑えるために飲んでいた鎮痛剤が、体の内側からの警告をも抑えてしまったのではないかと幸成氏はいう。

入院して二月にもならない令和元年（2019）8月24日、手代木信成氏は逝去された。享年80歳。幸成氏には生前から、「おれの死後は散骨してくれ」と遺言のように言い置いていたため、奥さまを同様に葬った同じ場所で、信成氏の遺骨は土に帰された。

（*） 升沢調査においても、テントを担いで目星をつけた場所に野宿して、シャッターチャンスを狙ったことがあった。クマ撮影のために目撃情報が多い場所にテントを張って夜通し張り番をしたが、待ち伏せするとかえって避けられるようで、残念ながらクマには最後まで出会えなかった。

（**） 一度、田植え踊りの写真展を仙台で開いたことがあり、小田嶋も観覧に行った。残された升沢の写真とはどこか異なって、

記録写真ではなく、さまざまな撮影技巧も使い、構図・色彩・効果などに個性をおしだした信成氏の作品になっていた。

田植え踊りなどの個々の民俗芸能の歴史は、廃絶と復興の繰り返しであることが多い。彼は休止した田植え踊りの踊り手を訪ね、衣装道具などを見せてもらい、かつて盛んだったころの踊りの思い出を聞き出しつつ、「なあに、おんつあん、踊ってみせらいん」と挑発し、のせて、その場で踊らせたりしたものだという。

（**） この時撮られた写真が、今回の展示にも使われている。升沢の本通り沿いの雪景色と、水が放流されている雪の中の坂道の風景である。なお、信成氏の撮影行にはさまざまな逸話があるようで、テントを担いで気仙沼にご来光を撮りに出かけた時、ときにはヒッチハイクをしたこともあるという。